

## JOMF 派遣医師便り (2020.01)

## ◆マニラ◆

トンド・BASECO のクリスマスイブ 2019 年 12 月 24 日

マニラ日本人会診療所

菊地 宏久

2019 年 12 月 24 日クリスマスイブ、妻とともに例年同様トンド地区周辺を訪れました。昨年まで継続的に訪問したトンドの North Port 沿いの本通りはほとんどのごみを取り払われていました。新しいマニラ市長になってから町全体の整備化が行われてきているとのことです。地区全体が明るく安全になった印象です。昨年は無かった中国ランタンが飾り付けてある家並みも見られました。水や電気も調達できているようで、昨年よりも安全な生活を送っている印象でした。

そこで、トンド地区に住んでいる女性にも現状を聞き、更に生活に困っている人たちが多く住む Pasig (パシッグ) 川南岸の BASECO 地区の“家の無い人々”を訪れることにしました。

道路の一角に小さな空き地があり、数家族が住んでいると思われる場所を見つけました。私と妻が近寄っていくととても痩せた青年が次々に 3~4 人寄ってきました。不審者を見るような目で、私たちを警戒しながら近寄ってきます。怪訝そうな顔をして私たちを見ている。“何をしに来たんだ”という疑いを持った目で見ています。

「メリークリスマス」と呼びかけると少しニコッと笑い、笑顔になってくれました。再度「メリークリスマス」と言うと「メリークリスマス」と答えてくれました。「ここに住んでいるのですか」、と尋ねると「そうだ」と答えました。妻が彼らと話していると他の大人達や、彼らの子と思われる小さな子供たちも急ぎ足でかけ寄ってきました。

子供たちは泥と汗と日焼けで真っ黒に汚れた顔や手をしています。3 才くらいの子供も小走りで近寄ってきました。もとは白かったと思われる、何か月も洗濯をしていない汚れの染みついただぶだぶの大人用 T シャツを着ています。近くには水道や火を扱うような場所は見当たりません。

日本人が珍しいのでしょうか。大人も子供も不思議そうに我々を見ています。話をしていると、母親と思われる女性が私の妻の手を取り別の場所へ案内しようとしています。そこは木陰で段ボールが置かれていました。“ここを見て見て”という様子です。女性がぱつと段ボールの覆いを取るとそこには何とかかわいい赤ちゃんがスヤスヤと寝ていました。マジシャンの技のようです。宝物を扱うようにみんな覗き込み、皆の顔が輝いています。そこは段ボールで覆われた赤ちゃんの大切な寝床だったのです。その数メートル離れた場所には 2 本の木があり、古い布の端切れで作ったハンモックのようなものがありました。そこにも別の赤ちゃんがスヤスヤと昼寝をしていました。

彼らの様子からは食事はきちんと摂っていないように思われました。「メリークリスマス

ス」とあいさつしながら、持参したケーキやクッキーなどのお菓子を配りました。手も顔も体も日焼けし、泥だらけになった手で急ぐように受け取りました。お菓子を受け取った子供の手は単に泥で汚れた手ではなく、「太陽や植物の葉っぱや便や尿で厚く染みついた皮膚」のように感じました。これは“しっかり力強く生きている手”なんだと思いました。

そこを後にして次の場所へ移動する途中に小さな橋が架かっていました。老人夫婦と思われる2人が橋の欄干に寄りかかるようにしゃがみ込んでいます。話しかけても返答する力がない弱り切った様子でした。妻が「家はどこですか」と聞くと、お爺さんの方が額に皺を寄せて「ここが家だ」とぶっきらぼうに答えました。とても痩せた犬がぴょこんと小さな箱から頭を出しています。傍にいて、いつでも老夫婦を見守っているようでした。メリークリスマスと言ってケーキを渡すと、弱い声で「メリークリスマス、サンキュー」と答えてくれました。

さらに Pasig 川沿いを移動すると、ゴミが集積している場所がありました。そこで 30代と思われる女性がゴミの中から何かを物色していました。「メリークリスマス」と話しかけながら寄っていくと女性は笑顔で対応してくれました。何かお金になるものを探し出しているとのこと。彼女と話していると仲間と思われる男たちが 10 人くらい寄ってきました。皆私たちに興味を持っているような表情でしたが遠慮気味に 1メートルくらい距離を置いて立っていました。「メリークリスマス」と呼びかけると「メリークリスマス」と皆が答えました。「あなたたちの家はどこですか」と聞くと「ここ、この場所」とその橋の上のゴミに囲まれた道端を指しました。「蚊には刺されませんか」と聞くと、「ここは蚊がものすごく多い、いつも刺されている」、「痒くないですか」と聞くと「痒くて痒くて辛い」と答えました。「病気になったりはしないのですか」と聞くと「デング熱に罹った」と、「重篤になったことはないですか」と聞くと「デング熱に罹って高熱のため二日間入院した」と話していました。

一方ゴミの傍で元気なさそうな、けれどとても優しくそうな一人の女性が静かに座っていました。1メートル四方の汚れた段ボールの陰に隠れるように静かに座っていました。妻が名前を聞くと、聞き取れないほどの小さな声で「ローシー」と答えました。ローシーさんの年齢は 35 才とのこと、「この段ボール箱が私の家」と言いました。

傍らにいた男性が「この女性はケーキをもらっていないよ」と声をかけてくれました。小さな社会ですが、“仲間”ができているのだと感じました。

貧しいけれど、優しく、素朴に生きている人々の心に触れ、“大切な何か”を感じたクリスマスイブの一日でした。

フィリピン、世界中の家の無い人々も安心して眠れる日が一日も早く来ることを祈っています。